

高度経済成長は酪農経営に何をもたらしたか

北海道畜産会主幹
酪農総合研究所

遠藤 清 司

はじめに

温故知新ということがある。過去を知り、現在を見つめ、はじめて将来の目標も計画も明らかになるものと思う。

わが国の酪農経営も、つい先頃までは野草や圃場副産物を主な飼料として、せいぜい4、5頭の小規模経営であった。それが高度経済成長に入った昭和35年頃より、世界に類例を見なかったテンポで農業経営や農村社会に著しい変化をもたらした。

つまり、外見的には著しく近代化が進められ、一部にはすでに欧州水準を追い越したと評する人すらいる現状である。

しかし思いがけない石油ショックを契機としてわが国の産業が減速経済に入ると、農業経営も基盤のぜい弱性を露呈し、もろもろの問題点が表面化し、反省検討を余儀なくされる羽目になった。

以下高度経済成長が農村にもたらしたもろもろの影響をたどり、改善の方向をさぐって見ることにする。

農村人口の減少

少なくとも高度経済成長以前のわが国農業経営の最大の課題は、少ない土地面積に働き手を過剰に抱えた過小経営であったといえるし、この構造が改造されないかぎり根本的には救い難いことであるということでもあった。

しかし、このことは農政的にも技術指導にしてもどうにもならないものとして、よけて通らざるを得ないものと多くの人は諦めていたと思う。

ところが、高度経済成長は農村の余剰労働力をどんどん他産業に吸収し、戦後農村に潜在していた不顕失業者を吸収したばかりでなく、必要労働力まで吸収するに至り、いわゆる3ちゃん農業なる「言葉」まで生まれることになったのである。

農村人口の流出に続く戸数の減少

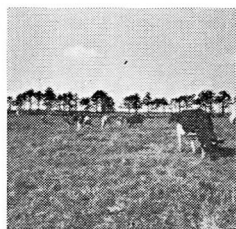
農村人口の都会への流出に続いて、暫くは3ちゃん農業も続くが、これもやがて離農の形をとるものが増加しだした。特に北海道では挙家離農の形をとるものが多かった

目 次

表紙②

- 高度経済成長は酪農経営に何をもたらしたか 遠藤 清司…… 1
- 自給飼料増産推進
モデル飼料畑耕作検討会 ——道央・道南・道北編——
上原 昭雄…… 6
- ゴルフ場訪問—後楽園カントリークラブを訪ねて 岡田 晟……12
- ルポ 若い酪農経営者をたずねて (熊本県) 小林 正勝……15

表紙③



放牧風景
(雪印種苗(株)長沼農場)

このようにして昭和30年代初期にみられたような次、三男対策や入植政策は次第に影がうすらぎ、規模拡大を中心とした構造政策へと移っていったのである。

戸数の減少に伴ない規模拡大が進んだ

戸数の減少に伴ない、離農跡地はそれなりに附近農家の面積規模の拡大を促した。

もちろん附近農家に理想的には結びつかず、幾多の問題を現在も残してはいるものの、曲りなりにも、残った農家の経営規模の拡大につながったといえる。

もちろん、高度経済成長は農民の生活意識を高め、36年農業基本法の成立と相俟って、他産業との所得格差の是正ということもあって、農民自身の規模拡大の積極的な意欲が諸外国に例をみなかった速度で拡大を進めたといえる。

規模拡大は農業の所得を著しく向上させた

規模拡大は当然のことながら、わが国の農業所得を著しく向上させた。

当時筆者は十勝農業試験場に専門技術員として駐在していたが、昭和30年の十勝支庁管内の農業総生産額は約25,000戸の農家で150億円程度であったが、10年後の40年には戸数は20,000戸に減少し、生産額は350億円となり、50年の現在は17,000戸程度で600億を越えると推定される。

もちろん農産物の価格の上昇があるとはいえ、1戸当りの所得は相当の水準で向上したといえよう。

諸外国に例をとるまでもなく、農家の個々の経営が安定する過程をみると、いずれの場合もまず農家人口の減少、それに続く戸数の減少があって、その後戸別農家の所得向上がみられたことから言って、基本的には高度経済成長はわが国の農業をよい方向に誘導したといえよう。

規模拡大は労力不足で苦しむことになった

高度経済成長の進む中で残った農家は好むと好まざるとにかかわらず、周囲の状況から規模拡大を余儀なくされたといえる。

それは労力と規模が均衡が採れているとか、採

れていないとかを考える暇も与えずといった急激なものであったから、農民は労力不足に対応するために四苦八苦した。

そして、そのことが農民の思想にも、また生産活動の上にも大きな変化をもたらし、減速経済に入った現在では軌道修正を考えざるを得ない段階のものもある。

以下農民が労力不足に対してどのような対応をして来たか、その主なものについて、ふり返ってみることにする。

(1) 生産手段の機械化が進められた

昭和35年頃までの農業をみると、日本における大型農業といわれた北海道でさえ、馬で耕して人手で刈取る、いわゆる畜耕手刈農法であって、トラクター農法などは夢であったといえる。

それが近々15年の間に30万頭(北海道の場合)の農耕馬はすべてトラクターに置き換えられた、正に革命といわざるを得ない。

しかも、はじめは15馬力程度でなお共同利用形態であったものが、30馬力、50馬力、いまや100馬力のトラクターも導入され、個人所得が多くなった。

(2) 各種施設の新設や内部施設の機械化が進められた

牛舎もはじめは厩舎改造のものが多かったが、これらは機能的にみれば不便で不合理なものであったから、多頭化が進むにつれて、省力的な牛舎に改造されたり、新築のものが多くなった。

また、牛舎内の管理用施設機械にしても近代化が進み、搾乳作業は手搾りからバケットミルクカーに移り、続いてパイプラインミルクカーに移り、一部にはフリーストール牛舎でパーラー搾乳方式さえみられるようになった。

糞出し作業にしても、一輪車からマニアキャリヤー方式に移り、現在ではバーンクリナー方式へと近代化されている。

飼料給与作業にしても、一輪車から手押大型配飼車に移り、一部にはファイダー(自動給飼機)にまで移行している。

サイロにしても世界的にも未だ一部にしかみられないエアタイト方式(気密)で下部から取り出すスチールサイロなども散見されるまでになっ

ている。

以上のような牛舎の新築や乳牛管理部門の激的な近代化は、どちらかという省力的立場からのみ進められ採算関係の検討には甘さがあった事例が多かったように思われる。

(3) 作物の種類を整理し単純化された

高度経済成長以前のわが国の畑作農業では百姓百色といわれるほど多種類の作物を栽培していた。

しかし、これでは労力的にも非効率であり、知識的には広く浅くならざるを得ないし、また、機械化する場合は多くの機械を装備しなければならず、資本効率がそれだけ低下するなど問題点が多い。

つまり、高度経済成長は農業に対しても、経済合理主義、労働合理主義を強く迫り、生業的な思想から、完全な企業として見直すようになり、その結果は専門化、単純化、大量生産という方向に誘導された。

このような訳で作物の種類も専門化の進行する段階で漸次整理単純化されたのである。

この結果輪作体系はくずれ、あるいは短期化し、連作傾向が強くなった。

(4) 飼料構造の単純化が進められた

高度経済成長以前の酪農経営では飼育規模も少なく、北海道であっても複合経営が主体であったから、飼料構造も複雑で、牧草あり、デントコーンあり、根菜類あり、ほ場残渣物あり、野草ありで、きわめて多種類であった。

しかし、高度経済成長は天候不順ということもあるが、できるだけ手間のかからぬ飼料生産を主眼として、デントコーンや家畜用根菜類の作付を少なくし、牧草の比率を高める農家が多くなり、極端な例では全く牧草だけという農家も気候的にコーンの不安定な地域には多くなった。

つまり夏は放牧と少々の乾草を給与し、冬期は草サイレージに乾草ということであるが、これが近年に至って、さらに手間のかかる乾草調製はできるだけ少くし、低水分サイレージだけで冬期間を飼養する傾向すら強くなってきた。

(5) 堆肥生産を軽視する思想が生まれた

高度経済成長の中で労力不足の農業は堆肥生産

を軽視する傾向を生んだ。

特に植物栄養生理学の研究は水耕培を可能にしたことから、堆肥不要論までとび出し、労力のかかる堆肥生産を嫌っていた農民の欲望に合致したこともあって、堆肥生産への努力は著しく後退した。

むかしは比較的農閑期となる7、8月は堆肥原料の野草刈や笹刈の季節でもあったが、現在では貴重な堆肥原料である稲わらやもみ殻などは邪魔物扱いにされ、火をつけて焼くのが当然といったような考え方にまできている。

このように労力不足に名をかりた堆肥生産の後退と、先に述べた作物の単純化や飼料構造の単純化は、輪作体系の乱れと相俟って地力を急激に低下させてきている。

地力低下の進む中で収量は向上した

作物の単純化による輪作体系の後退や堆肥軽視の風潮の中で急激に地力低下が進んだといわれる。しかし、それにもかかわらず水田にしても、畑作にしても、収量が相当向上したことも事実である。

なぜだろうか。品種改良や土地基盤の整備（排水、深耕、心土耕）などもあろうが、最も大きな影響を与えたものは化学肥料の増施であり、農薬の開発であり、多用であるといえよう。

つまりどこの農場の窓口をみても、ここ数十年の間に肥料代金は数倍に増加している。

しかもオイルショック以前の数十年間の化学肥料の単価は諸物価のジリ高を続ける中で、磷酸、加里肥料は10%程度上昇したとはいえ、窒素肥料は逆に10%程度値下りしているから、全体としては概ね横ばいであったといえる。

したがって、肥料代金の増加率はストレートで量的増加と解することができるから、化学肥料の使用量は年を追って増加し、それが地力減退にもかかわらず収量は向上した第一の要因であるといえよう。

第二の要因として農薬の開発があげられる。

戦前農薬といえばボルドー液が代表的なものであったが、現在では数えられないほど多種類の農薬が開発され、病虫害防除剤をはじめ、生長促進

剤、活着促進剤、授精促進など多面にわたり、しかもその効果も高いものが多く、これらが収量をより確実に向上させたといえよう。

その他多くの栽培技術の改善や開発も大きく影響した。

農村社会にも大きく変ほうをもたらした

(1) 農村の住宅がよくなった

昭和30年代前半までの農村の住宅は全般的に粗末であったといえる。特に北海道の開拓地などはその代表的なものであったし、古い農家でも決して立派なものではなかった。

それが高度経済成長の発展過程の中で増改築、新築の住宅が目立ちはじめ、もうむかしのようなあばら屋の住宅はほとんど見ることはできない。

(2) 道路がよくなった

現在では都会の道路も、農村の道路にも大きな差はなくなった。

つまり農村でもほとんどの道路が舗装され、馬車でゆられたデコボコ道はもうさがしても見当らなくなった。

(3) 農村の生活も都市化した

農村の生活といっても現在は水道があり、冷蔵庫、洗濯機、クリーナーが備えつけられ、自家用車やステレオ、カラーテレビを所有し、他産業のしかも経済的に恵まれている人達と差はないように思う。

また、食生活の分野においても、近頃ではきわめて接近し、大きな差はないという。

つまり、農家であっても、従来のように特別なもの以外はすべて自給自足するという態度は後退し、購入食糧に依存するという傾向は強くなったというのである。

特に大型専業酪農家などでは大根一本、白菜一個の果まで購入に頼り、ほとんどの農家が卵などは購入して食べるものというように変わってきている。

農村を外部からみると

以上のように高度経済成長は農村を急速に変ほうさせた。舗装された道路に沿って立派になった住宅が点在し、赤い屋根の牛舎、サイロが目につ

く。

畑には馬に代ってトラクターが走っており、放牧地では数年前までは見ることのできなかった、大きな集団の牛群が悠々草を食っている。

確かに農村は変わった。1戸の酪農家にしても多頭化が進み、バーンクリナーが入り、パイプラインミルクカーやバルクタンクが導入され、自動給飼機までが入るようになった。

確かに外部から見る限り農村環境はよくなり、農業経営は近代化され、農家の生活は豊かになったように見受けられる。

しかし、本当によくなったのであろうか。問題はないのだろうか。残念ながら、内容に立ち入れば経営的にも、生産技術の面でも多くの問題に直面しているといわざるを得ないのである。

酪農経営の現在の問題点と改善の方向

(1) 負債の累増と改善対策の方向

多頭化に伴う労力不足の対策として機械の導入、施設の新設、増改築などをはじめ、土地取得など新規投資が多額に上り、しかも馴れない多頭飼育の技術は年度収支においても計画どおり生産が上がらず、反面支出は計画を上回るなど負債は予想外に大きくなった。

改善の方向としては、綿密な営農計画を自分で真剣に検討して樹て。実践段階では計画は必ず実行する強い行動力を堅持する必要がある。

従来の傾向をみると単位当り生産の高い人ほど赤字が少なく、黒字になっていることから単位当り生産の向上に最大の努力をすることが最も重要なことである。

しかし、すでに一定限度以上の負債額となり、しかもプロパー額が大きくなった場合はどうしても農協の特別計らいによる割賦償還の処置と、場合によっては負債整理をお願いしなければならない者など個人の努力が第一ではあるが、関係機関の援助をどうしても必要とする段階の者もある。

(2) 土地生産力の減退と改善の方向

規模拡大の進行とともに作物が整理され、輪作体系がくずれ、労力不足は堆肥生産を軽視する傾向を生み、牧草の永年化が進み、地力を減退させてしまった。しかも大型の重量機械がほ場を頻繁

に走り回ることにより、土じょうを硬化させ、通気性を著しく不良にしたために地力の減耗に加えて、湿害の発生を多くする原因になっている。

これが改善の方向としては、酪農専業経営であってもデントコーン導入は当然ながら（適作地）、さらに根菜類を入れて牧草の更新を計るとともに（土改材を十分投入）堆肥をこれらコーンや根菜類に重点的に投入して多収と地力の維持増進を計る必要がある。

その他、深耕、心土耕、排水なども場合により併用してゆくことが必要である。

③ 1頭当り乳量の向上が所得拡大の基本

酪農家の場合、所得拡大の対象物は何んといっても生産総乳量であり、その乳量の拡大をある人は頭数規模の増加に求め、ある人は1頭当り乳量の向上に求めているといえる。

しかし、高度経済成長過程ではどちらかとういと頭数規模の拡大に求めた人が多く、しかも省力ということで個体管理がおろそかになり、また飼料構造でも根菜を省いて単純化し、そのために全般的には1頭当り生産乳量は停滞し、その反面で投資が多くなった。

今後は個体別に乳量と分娩後の月数や栄養状態に対応した配合飼料給与に徹し、基礎飼料の質の向上と量的には十分与えることにより1頭当り生産乳量の向上に特別な努力を払う必要がある。

④ 農村生活をもう一度見直す必要がある

高度経済成長は農家生活の面にも、労働合理性とか経済合理主義が持ち込まれ、農家でありながら都会生活者と同じく、ねぎ一本、キャベツ一個の果まで購入に依存するようになり、自家用にわとりなどは全く姿を消すに至った。

先年ヨーロッパの農家で食事を御馳走になる機会があったが、豪華な食事であったがその大部分は、農家の自家生産によるものであった。

農村の特質と環境を生かした生活はどうか、もう一度見直す必要があるように思う。

おわりに

高度経済成長は農業経営をはじめ農村社会に大きな変革をもたらした。

農業経営を企業的に見つめ、経営の近代化を大きく前進させた。

しかし、農業経営の仕組みは当面の経済合理性だけを追い、手抜きをすると、いろいろな問題点が現われだすものである。

減速経済時代に入った現在、単位当り生産を高め、経費の通減を計るためには、農業経営のもつ特質をよく理解し、土地を愛し、輪作を進め、堆肥を増産し、収量を高め、牛を愛し、1頭当り乳量をも高める基本的態度が特に要求されるのである。

昭和51年度 雪印アピール

牧草で土を作ろう

牧草の根は有機物で土をたがやす

牧草地の更新、牧草を入れた輪作

牧草を鋤き込む緑肥

それは飼料を増産しながら土を作る

生活を緑で守ろう

砂漠に生きものは住めぬ

コンクリートの街は人を蝕ぼむ

家庭も街も工場も

そして荒地も

芝草、樹木の緑で埋めて

人の生活を守ろう